

「南アルプス地域におけるエスノスケープの保全に着目した冒険観光の可能性」

赤穂 雄磨

【要旨】

近年、スリルよりも異文化体験を希求し、そこからの学びや発見を通じて自己変革に至るアドベンチャーツーリストが増えている。これは現象として先行研究により確認されているものの、具体的にどのような「学び」がアドベンチャーツーリズムの中で彼らを自己変革に導いているのか、そのメカニズムは明らかになっていない。

そこで本研究は、既往研究の考察から彼らを旅行者ではなく、セレンディピティな出会いや出来事を通じて新しい自分を発見する、越境的学習者であると仮定する。そして社会生態学的・社会文化的境界を越えるために必要な、彼らのコンピテンシーを形成する好奇心、自己効力感、楽観性などの非認知能力を測定することで、この仮説を検証する。これにより学習嗜好という視点から、自己変革に至るメカニズムを明らかにする。

検証は、その土地ならではの民族の暮らしの風景（エスノスケープ）が保全されている日本の南アルプスユネスコパークを対象地とし、その風景を異文化と認識できる外国人旅行者（n=13）を対象に実施された。非認知能力の多寡と自己変革の有無は質問紙により計測し、当該地における学びや発見に関する行動は参与観察を通じて記録され、いずれも質的比較分析により、自己変革に至る条件を分析した。

まず自己変革に到達しやすい旅行者はほぼ全ての非認知能力が高いことが分かり、仮説は支持された。また参与観察データの分析から、肉体的アクティビティや目を引く文化的コンテンツがなくても、旅行者と日本人、旅行者と旅行者同士の異文化交流、およびエスノスケープがあれば、旅行者は自己変革可能であることが分かった。さらにこの結果から、当該地域のエスノスケープの保全の重要性を高め、さらに地域の人々にも異文化的なバックグラウンドを持つ旅行者との交流を促す可能性をアドベンチャーツーリズムが持つことも示唆された。

今後は対照実験等によりこうした冒険旅行者と観光客との「学び」に向かうコンピテンシーの差異を明らかにすることで、仮説は頑健性を増すだろう。そして、エスノスケープから学び・発見をする越境学習者の存在が明らかになることで、エスノスケープの保全に向けた市民のシビックプライドの醸成にも貢献できよう。